これはまさに、究極のポンポン船だ!

むかし銀座で買ったトイボートはエピソード満載の逸品だった

小誌編集スタッフが毎月交代で、好きなテーマを選んでOK! というこのコーナー。今月クボタが取り上げるのは、ぼくらの世代なら懐かしさを覚えるポンポン船。ただし、ここで紹介するモデルは造りが半端じゃなくて、さらに造った人のプロフィールも興味深く、どうしてそんなネタと出合ったのかというと縁がありまして……これじゃなんのことかわかりませんね。さっそく、本文をお読みください。

[文]クボタヒデヤ(本誌)
[写真]山岸重彦(本誌)

私物のトイボート

今年の6月号の特集「Go ahead! 日本のボーティングをあきらめない」で、各ページにアイコン的に載せた写真のトイボートが、今回取り上げる「グッピー」である。15年ほど前、東京・銀座の模型店、天賞堂で購入したぼくの私物を、特集のアイコンに起用したのだった。

こうやって人さまの意匠を誌面で使う場合には、許可を取るのが基本である。6月号のグッピーでもメーカーに連絡を取ろうとしたのだが、パッケージには連絡先の記載がないし、ネットで調べてもわからない。しかし、現在メーカーが活動していないことは間違いないようなので、連絡先調べはあきらめて、例外的に許可を得ないまま使わせていただくことにした。

そして6月号(重たいテーマの特集でした)が発売されて数週間後のある日、外出先から会社に戻ると、ぼくの机の上に「グッピーの関係者の方から連絡がありました」との伝言メモが。すわ、これは無断利用に関する抗議か、どうやってお詫びしよう……と青くなったが、その関係者、野田 栄さんにお会いしてみると、話は正反対でありました。

6月号の特集に登場したグッピー。ちなみに同号の表紙イラストのボートは、タダミさんにグッピーをモチーフにして描いていただいたものだって、気づきましたか?

グッピーの走らせ方

走る原理はポンポン船と同じである。ボイラーのなかの水がロウソクの炎で熱せられて水蒸気が発生すると、船尾のパイプから水を噴射して推進力を発生。続いてパイプのなかに水が逆流して入り、また加熱されて噴射――を繰り返す。走らせ方は、①スポイトで船尾のパイプから水を入れてボイラー内を水で満たす。②付属のしょく台に短く切ったロウソクを置き、火を付けたらボートにセットする。数秒すると、ボイラーの薄板部がふくらんだりへこんだりを繰り返す「カタカタカタ」という音を出して、走り始める。③針路は船尾のラダーの向きを調整して、ちょうどいいところを探す

ユーチューブの画像名：
1109guppy

撮影用に購入した“昭和の香り”たっぷりの金ダライのなかを、元気に走り回るグッピー。癒やされるその走りの模様は、上記のQRコードまたは画像名でアクセスできるユーチューブの動画でどうぞ

日ごろからボート、ヨットを楽しむ野田さんは小誌も読んでくださっているそうで、6月号を一読して「あっ、これはお義父さんが造ったグッピーじゃないか！」と目を見張ったという。そう、野田さんはグッピーの開発者である今井康太郎さんの娘婿だったのである。

というわけで、抗議どころか「義父の思い入れのある製品を誌面に使っていただき、ありがとうございます」とお礼を言われて恐縮する始末。ぼくはグッピーの形と質感が気に入って購入したのだが、野田さんの話を聞くと、この船体長72ミリの小さなトイボートには、あふれんばかりの造り手の思いが詰まっていることが明らかになったのだ。

素材と造りに妥協なし

グッピーは、1981年ごろ、工業デザイナーの今井さんが「本物のおもちゃを届けたい。マリンの世界を広める一助にしたい」と願って開発した「世界一小さな蒸気船」である。推進システムはポンポン船のそれだが、ブリキ製のものとは比べものにならないこだわりと品質で造られている。

まず素材。ポンポン船といえば、ふつうはブリキ製だが、グッピーはアルミ製、それも航空機用のハイグレードなものを使用している。

このアルミを、なんと全部で80個の型を使って成型している。パーツが80個あるのではない。曲面をきれいに仕上げるために、中間成型を何段階も入れたことにより、これだけの型が必要になったという。そして成型には、当時の一眼レフの軍艦部（プリズムを収めた部分）を成型するためのプレス機を使用。その結果、きついR部にも成型シワは皆無で、ハルとデッキとの接合部の精度もすばらしい。

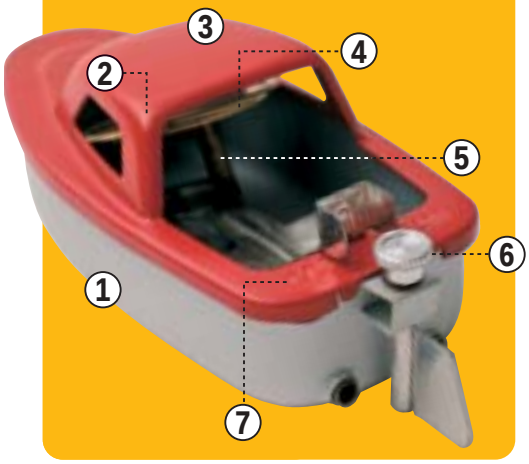
船型を見ると、ラウンドチャインではあるものの穏やかなVハル形状で、これまたブリキ製ポンポン船の船型とは一線を画した、専門性をうかがわせるラインである。

デッキから上の着色にはデュポンの耐熱塗料を使用しているため、動力源であるロウソクの炎が当たっても劣化しない。またボイラー部はベリリウム合金と真ちゅうのパーツを銀ロウ付けで溶接してあるので、ハンダ付けのようにすぐ壊れることもなく、

手の大きさと比べてもらえば、船体長72ミリという小ささが理解できるだろう。船尾のパイプから元気よく水を噴射しているのがわかりますか？

グッピーのこだわり

①ハルとデッキには、航空機用アルミ素材を採用。②全部で80個の型を使用したていねいなプレス加工により、どこにも成型シワのないきれいな仕上がり。③塗料はデュポンの耐熱塗料。④ボイラー薄板部の素材はベリリウム合金。⑤パイプは真ちゅう製。溶接は耐久性にすぐれる銀ロウ付け。⑥ラダーの角度調整つまみはローレット加工を施したリュウズタイプ。⑦「COMO JAPAN」の刻印。今井さんの会社の名前である



（上）今井さんのご自宅内にある仕事場でお話を伺う。ぼくが少年のころ家にあった液晶温度計が今井さんの作と聞いてびっくり。ほかにも興味深い話が目白押しで、いやあ楽しいのなんの
（下）ポンポン船の原理を図解で説明していただく。単純な構造だが、うまく走らせるためには、ボイラー部の大きさとパイプの長さとの関係などに微妙な設定が必要らしい

（上）数十年前、ヤマハ発動機のボートデザイナーだった堀内浩太郎さんのヨットのキャビンで撮った写真。右端が堀内さん、左から2番目が今井さんだそうだ
（下）今井さんが開発したウインディーという風船をふくらませるマシンの資料。そういえば、むかしどこかのショッピングセンターで見たことがあるような気がする

今井康太郎さん。少年のころからのモノ好き、乗りもの好きが高じて、工業デザインの道に進む。陸・海の乗りもののほかインテリア、オーディオ、パワーツールなど、さまざまなジャンルでデザインの腕をふるった

こちらも耐久性は十分だ。

要するに、これはもう「おもちゃ」と呼ぶには過ぎたスペックのトイボートなのである。いったい、この究極のポンポン船とでも呼ぶべきグッピーを造ったのは、どんな人なのか？　野田さんの案内で、その人、今井康太郎さんを神奈川県藤沢市のご自宅に訪ねた。

元ボートデザイナー

現在64歳の今井さんは、長年、さまざまなジャンルで活躍されてきた工業デザイナーである。若いころはアメリカでデザインを学び、帰国後の1970年ごろ、コマンドクラフトというビルダーを買収してボート事業を始めたいすゞ自動車のマリン部に入り、同社のガルーダ・シリーズのデザインに携わった。

「ボートのデザインはクルマほど分業

「これは習作。もっといいのがあったんだけどなあ」と言いながら今井さんが見せてくれた、いすゞ時代に描いたボートのスケッチ。20フィートくらいのランナバウトだ

グッピー開発時の試作品が残っていた。こうして一個一個手作りして細部を詰めていく手法は、いまのコンピューターシミュレーション世代のエンジニアには考えられまい

（左）神奈川県藤沢市にあるご自宅も、基本設計は今井さんが行った。輸入材を使った外壁のデザインがしゃれているが、屋内もすてきなインテリアに満たされている
（右）ご自宅には“男子の夢”たるガレージも。ボール盤やグラインダーなどの各種工具類もばっちりそろっている。収まるクルマがメルセデスW123というのも渋いです

そしてなんと、今井さんはジャズピアニストでもある。「勤め人だったときには、給料よりクラブで演奏して稼いだアルバイト代のほうが多かった」そうだ。多才な方なのである。奥は娘婿の野田さん

化されていないので、一人でいろんなことができて、やりがいがありました。開発も手伝っていて、24フィート艇に一人で乗り込み、伊豆大島まで往復したこともありましたねえ」

と懐かしそうにむかし話をしてくれる今井さんは、小さいころから乗りものや機械が大好きで、その興味の赴くまま、工業デザインの道に進んだ。叔父さんがヨットを所有していたこともあって、フネにも中学生のころから親しんでいた。

いすゞがマリンから撤退したのを機に同社を退職。その後はいろいろな会社のデザイン業務を請け負ったが、一時はヤマハ発動機の仕事もしていたという。

「私の業務は二輪車のデザインでしたが、マリン事業部とも交流はありました。ボートデザイナーとして有名な堀内浩太郎さんが取り組まれたヤマハ製4輪車の開発で声をかけていただき、お手伝いしましたけれど、このプロジェクトは製品化には至りませんでした」

こうして工業デザイナーとして脂の乗った仕事をしていた今井さんは、81年ごろ、グッピーを開発する。それまでのキャリアを存分に生かし、工学理論に基づいて設計を行い、高品質な素材と精密な加工技術を用いて造ったのは前述のとおり。まさに、日本のモノづくりの精神を宿したかのようなトイボートである。

「販路も自分で開拓しましたが、あるおもちゃ屋さんの社長には『これはおもちゃではない。だって壊れないでしょ?』と言われました」

結局、グッピーは子どものおもちゃというよりは、モノ好きな大人の愛玩品のような位置づけになり、ぼくが購入した天賞堂のほか、伊東屋、科学教材社、キディランド、ソニープラザ本店、東急ハンズ本店など、首都圏のモノ好きが集まる店で販売された。

しかし、そんなマニアックな商品では、売れる数は推して知るべし。いつしかグッピーは店頭から消え、おもちゃの世界ではキャラクターものなどの、一見してわかりやすい商品が幅を利かせるようになる。そして、ちょうどそのころ、日本のモノづくりは「人の手と心」ではなく、おもにコンピューターによって開発が進められる時代を迎えていたのである。

＊

今井さんが思いを込めて造ったグッピー。その精巧な曲面部を指でなぞりながら、テレビゲームで育った現代の子どもたちは、このトイボートが持つ深遠な世界がわかるだろうか、とため息をつく。でもグッピーを水に浮かべ、ロウソクをセットして数秒後、「カタカタカタ」とかわいい音を立てて走り出す姿を見ると、ため息は忘れて、少年だったあの日に帰ることができる。

つまりグッピーは、おもちゃを超えたトイボートであると同時に、オジサンのハートをつかんで離さない究極のトイなのである。

クボタの結論：
走り出す、オジサンの郷愁
そこに時代の航跡が見えるのだ

今回の縁は、今井さんのところでデッドストックになっていたグッピーを、舵社・用品事業部で販売する、という結果も生んだ。詳しくは巻末のカタログページを参照してください

船体、しょく台、ロウソク（3本）、スポイトがセットになったグッピー。興味のある方は、在庫のあるうちにお早めにどうぞ